ASHURA AND
THE HEART OF IRAN

رایزنی فرهنگی سفارت ج.ا.ایران در ژاپن
駐日イラン・イスラム共和国大使館イラン文化センター

アーシュラー
と
イラン人の心

なぜ1400年間、
人々は泣き続けるのか

正義のために立ち上がり、
すべてを失いながらも、
信念を手放さなかったフセイン。

彼の物語は、イランの心の奥で
今も生き続けている。

宗教を超え、文化を超え、
人間としての尊厳と、
弱い者と共に生きる勇気を、
私たちに問いかけてくる。

YA
HUSSAIN

イランでいちばん
静かで、
いちばん熱い
10日間。



正義のために立つ勇気
フセインが守った
普遍的な価値とは

イランをひとつにする10日間
涙がつなぐ、見えない絆

ナズリーという文化
見返りを求めない、
イランの「おもてなし」

CONTENTS
目次



アーシュラーは
昨日の出来事ではない。
それは、今日の私たちを
形づくる生きた記憶。

01
一人の男が「否」と言った日
すべては、カルバラーの砂漠から始まった。 04

02
フセインが守ろうとしたもの
3つの普遍的なメッセージ 06

03
なぜ1400年間、
人々は泣き続けるのか
勝てない戦いを選んだ男の物語 08

04
イランが黒に染まる10日間
街が、心が、すべてが変わる 10

05
見知らぬ人に食事を配る
ナズリーの文化 12

06
1400年続く野外劇場
タアズィエの世界 14

07
太鼓と旗の行列
街が一つになる日 16

08
子どもたちのムハッラム
体で覚える記憶 18

09
アーシュラー当日
イランで最も静かで
最も激しい日 20

10
なぜイラン人は折れないのか
アーシュラーが作った心の形 22



「記憶は消えない。
なぜなら、それは
人々の心の中で
生き続けているからだ。」

はじめに イラニッポンより

この物語を、なぜ届けたいのか

私は、イランのムハッラムを初めて見たとき、強く揺さぶられました。
それは、宗教行事というよりも、人々の「記憶そのもの」に見えたのです。

街が黒に染まり、知らない人同士が食事を分け合い、
涙をこらえながらも、誇りを持って歩き続ける——
その光景は、1400年前のカルバラーで起きた出来事が、
今この瞬間も、イランの人々と共に生きていることを教えてくれました。

なぜ、これほどの時間が経っても、
人々の心は折れないのか。
なぜ、フセインの物語は、国境や言語を越えて、
これほど多くの人の胸を打つのか。

この問いの答えを探すために、私は何度もイランを訪れ、
人々の声に耳を傾け、街を歩き、共に泣き、共に食事をしました。
この特集は、その旅の記録であり、イラン人の「心の軸」を探る試みです。

これは、宗教の本ではありません。
これは、イランという国と、そこに生きる人々の、
強さと優しさの理由を探る旅の記録です。

どうか、この物語が、あなたの心にも何かを残しますように。
そして、いつかイランの人々に会いに来てください。
彼らの温かさと、まっすぐなまなざしが、きっとあなたを迎えてくれるはずです。

Iranippon

イラニッポン
Iranippon /



信念は、強制されない。
それは、心で選ぶもの。



悲しみは、弱さではない。
それは、記憶する力。



見返りを求めない優しさが、
人々をつなげている。



歩みを止めないことが、
未来をつくっていく。



アーシュラーは終わらない。
それは、永遠の問いかけ。

PART 01
KARBALA
680 AD

01 一人の男が「否」と言った日

カルバラーの真実

西暦680年、砂漠の中の小さな土地・カルバラー。
一人の男が、圧倒的な権力に対して「否」と言った。

彼の名はフセイン。預言者ムハンマドの孫。
ウマイヤ朝の支配者ヤズィードは、フセインに忠誠を誓うよう迫った。
権力に従えば、命は助かる。
だがフセインは言った——

> 「私は、死をもってしか
> 生きられない生よりも、
> 誇りをもって死ぬことを選ぶ。」

彼は家族と72人の仲間とともに、
数万の軍勢に囲まれた。
水を断たれ、3日後の朝、彼は戦って倒れた。
その日がムハッラムの10日目——アーシュラーだ。




水も希望も断たれた三日間


それでも、彼は立ち続けた


真実のために、最後まで戦った

歴史は、勝った者の物語を
記録する。
だが、人々の心は、
真実のために立ち上がった者を
決して忘れない。


アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか
یا حسین
砂漠の風は、今も語り続ける——
「否」と言った男の物語を。

フセインが守ろうとしたもの
―3つの普遍的なメッセージ

フセインの戦いは、特定の宗教や民族のためではなかった。
彼が守ろうとしたのは、もっと根本的な何かだ。

第一に「正義」

権力が腐敗しても、
それに黙って従わないこと。

第二に「尊厳」

生きながら自分を失う
「生きた死」を拒否すること。

第三に「責任」

自分だけ安全な場所に逃げるのではなく、
弱い者と共に立つこと。

彼はこう言ったとされる。

「人々よ、もし宗教を持たないなら、
せめて自由な人間であれ。」



この言葉は今も、
イランの街角に
書かれている。”

CHAPTER
03

アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか

なぜ1400年間、人々は泣き続けるのか

歴史上、多くの英雄が死んだ。
だが、1400年後も毎年数億人が泣く死は、
そう多くない。

なぜフセインの死は
これほど深く刺さるのか？



“その涙は、
時代を超えて、
心から心へとつながっている。”

01

彼は「勝てない戦い」を
知りながら選んだからだ。

逃げることもできた。
交渉もできた。
それでも残った。

彼は、自分の信じる正しい道から
一歩も引かなかった。



02

彼と共に死んだのは、
戦士だけではなかった。

赤ちゃん、子ども、姉妹、妻——
家族全員がカルバラーにいた。

戦場には、無垢な命も、
守られるべき命も、
共にいた。



03

その悲劇は、
普通の人間の悲劇だった。

歴史の大英雄ではない。
特別な力を持つ人でもない。
愛する人を失い、故郷を失い、
それでも信じた道を貫いた——

だから、普通の人間が泣く。
自分の物語のように。



イランが
黒に染まる10日間

毎年ムハッラムが来ると、イランの街は一夜にして変わる。

黒い旗が窓から下がる。店の前に黒い布が張られる。
人々は黒い服を着る。テレビは音楽を止める。

この10日間、イランには
2500万以上の
追悼の集まりが開かれるとされる。
村でも、都市でも、どこでも。

なぜここまでするのか？

イラン人にとってムハッラムは「昔の話」ではない。
今年も、フセインは渇きの中で倒れている。
今年も、その悲劇は続いている——
そういう感覚で生きる10日間だ。

> これは過去の記憶ではない。
> いま、私たちの心の中で起きている
> 現実だ。


フセインのために泣くことは、
不正義のない世界を願うこと。
それが、10日間続く。

見知らぬ人に食事を配る
— ナズリーの文化

ムハッラムの間、イランの街角には大きな鍋が並ぶ。



誰が料理するのか——

近所の人々だ。お金を出し合い、前日から仕込む。



誰が食べるのか——

誰でもいい。知らない人も、
外国人も、お金のない人も。

「ナズリー（Nazri）」と呼ばれるこの文化に、義務はない。
見返りも求めない。ただ、フセインへの追悼として、
誰かに何かをしたい——その気持ちだけで動く。

> 日本語に「おもてなし」という言葉がある。
> 対価を求めない、心からの歓待。
> ナズリーはイラン版のおもてなしかもしれない。


یا حسین
مهمان حسین باشید
りを求めない
の優しさが、
の心をつなぐ。
یا حسین

CHAPTER

06

アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか

1400年続く
野外劇場
― タアズィエ

日本に能や歌舞伎があるように、
イランには「タアズィエ（Ta'zieh）」がある。



舞台は街の広場。
屋根はない。照明もない。
衣装だけがある。

演じるのは、近所の素人たちだ。
台本は書かれていない——
世代から世代へ、
口伝えで受け継がれてきた。

テーマは一つ。
カルバラーの悲劇。











驚くべきことに、
この演劇は 1400 年間
途切れていない。
戦争の時も、革命の時も、
疫病の時も。

> 生きた記憶を、
> 生きた体で伝える——
> それがタアズィエだ

CHAPTER

07

アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか

太鼓と旗の行列
街が一つになる日
― ドステ（Dasteh）の魅力

太鼓が鳴り始める。黒い旗がなびく。



一人が歩き始めると、
十人になり、百人になり、
千人になる。

これがイランの
「ドステ（Dasteh）」——
ムハッラムの行列行進だ。





参加者は胸を叩き、詩を唱える。
その詩はフセインへの呼びかけだ。
「あなたのことを忘れていない」という、
1400年間変わらない約束。

日本の祭りも、
神輿を担いで街を歩く。
形は違う。

でも、共同体が一体となる
あの感覚——それは
どこか似ている。



CHAPTER

08

アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか

子どもたちのムハッラム

体で覚える記憶

― 体で覚える記憶

小さな子どもが黒い服を着て、
親の手をつかんで歩く。



まだ意味はわからない
かもしれない。
でも、太鼓の音が体に入る。



大人たちの涙が目に入る。
ナズリーの温かさが
舌に残る。





イランでは、ムハッラムは
「教科書で学ぶ歴史」ではない。
体で経験する記憶だ。

何年かして、
その子どもは自分の子どもの
手を引いて、
また同じ場所を歩く。
そうやって、
1400年の物語は
途切れない。



CHAPTER

09

アーシュラーとイラン人の心
なぜイラン人は折れないのか

アーシュラー当日——イランで最も静かで最も激しい日



朝は静かだ。
店は閉まっている。
音楽はない。
街は息をひそめている。

でも午後になると、
何かが変わる。
太鼓の音、詩の声、泣き声——
すべてが重なって、
街全体が一つの感情になる。

アーシュラーの日、
イラン人は個人として泣かない。
集団として泣く。
隣の人も泣いている。
知らない人も泣いている。
その涙はつながっている。

日本に「もののあわれ」
という言葉がある——
美しさと悲しさが重なる感覚。
アーシュラーは、
その感覚に近いかもしれない。




“
その涙は、
つながっている。
時代を超えて、
心から心へ。
1400年続く、
一つの物語。
”

なぜイラン人は折れないのか

── アーシュラーが作った心の形

イランの人たちと話すと、
逆境への不思議な強さを
感じることがある。
それはどこから来るのか。

心理学者たちは
「集合的記憶」と呼ぶ。
毎年アーシュラーで繰り返される体験が、
イラン人の中にある感覚を育てる――
「苦しくても、正しい道を歩む」
という感覚だ。

フセインは負けた。
でも、1400年後も人々は彼を
「勝者」と呼ぶ。
これは、勝ち負けの定義そのものを
書き換えている。

圧力をかけられるほど、
その記憶は強くなる。
外から折ろうとするほど、
内側の軸は固くなる。

アーシュラーは、宗教行事であるとともに、
イラン人の**「心の構造」**そのものだ。





“

苦しくても、
正しい道を歩む。

— 1400 年変わらない感覚

”

彼は倒れた。
だが、その生き方が、
今も私たちを支えている。





心をつなぐ悲しみが、
未来を照らす光になる。

ASHURA AND
THE HEART OF IRAN

رایزنی فرهنگی سفارت ج.ا.ایران در ژاپن
駐日イラン・イスラム共和国大使館イラン文化センター